後輩たちへ伝えたい言葉

皮心伝心

苦手もものの上手なれ

欠田　成人
済生会松阪総合病院皮膚科部長

私は小さいときから血をみるのが苦手でした．術野にごく少量であっても拍動性の出血をみると，いまでも“ドキドキ”します．高校3年生のとき，血が怖くてせっかくいただいた医学部への推薦を辞退し，興味のあった物理の道へ進みました．それがいまでは地方の総合病院で一人医長として週4件，年間200件の手術を行っています．

好きこそものの上手なれ．皮疹が毎日目にみえてダイナミックに変化する薬疹やアレルギー疾患に興味をもちました．目にみえる皮疹から自分で組織を採取し，病理を読み，背景にあるメカニズムを考えながら治療を行い，患者さんとともに治療効果をみながらフォローアップを通じて未来を考える日々．皮疹が改善し喜ぶ患者さんが増える分だけ，さらに臨床が楽しくなっていきました．自宅のリビングの窓からすぐそこにみえる病院での勤務は，2泊3日以上の旅行や学会出張がなければ入院患者さんの皮膚の変化を毎日観察できる最高の環境です．

三重大学医学部附属病院勤務時代，田舎の大学病院では熱傷の手術もせざるをえず，そのおかげで現在は『熱傷診療ガイドライン』の作成にも携わっています．ただ，デブリードマン施行部位からどんどん溢れ出す出血を恐れるあまり壊死部分の除去が甘くなり，先輩よりも植皮の生着が悪いことがよくありました．

私は現在，年間300件を超える皮膚エコーを行い，日常診療でフル活用し，その有用性を皆さんに広める活動をしています．今回この原稿をご依頼いただき改めて気がついたことが，積極的にエコーを使う理由の1つは，手術時の出血を限りなくゼロに近づけたい，“ドキドキ”を減らしたいからだということでした．あらかじめ血管の位置を把握し，適切な処理を行えば余計な出血や無駄な侵襲をなくし，術後トラブルを減らすことができます．私の“苦手”も実はよりよい低侵襲な手術を通じて患者さんの役に立っている（はず！）．苦手であったからこそ進歩の種になったのだと思います．

皆さんもぜひ，苦手な分野を意識してそこに少しでも挑戦してみてください．きっとよりよい皮膚病診療への第一歩になると信じています．

……とはいいつつ，やっぱり私は美容分野は苦手だなあ．これから頑張ってみようかな．

2026/11/11 08:52:15